

第3回 E C A F E 石油資源開発 シンポジウムについて

井島 信五郎

昭和40年11月10日(水)から 同20日(土)までの11日間 東京高輪プリンスホテルを会場として ECAFE の第3回アジア極東石油資源開発シンポジウムが開催された。ここに その会議の様子 経過などのあらましをとりあえず報告する。

I 会議開催までの様子

この石油シンポジウムは 1958年12月 インドのニューデリーで最初に開かれ ECAFE 地域の石油資源開発に関する問題が取り上げられた。次いで「第2回」が1962年9月イランのテヘランで開催されている。第1回および第2回シンポジウムとも世界的関心をよびこれらの報告をうけた経済社会理事会および国連総会とともに ECAFE 地域の石油資源開発促進を目的とする多くの決議を採択している。「第3回」を日本で開催する計画は第2回シンポジウムにおける日本政府の「東京における開催の可能性を考慮しつつある」との言明に基づき その後 ECAFE 事務局と日本政府(外務省)との間で数次の折衝を重ねた結果 今回東京で開催されることが決定した。そこでわが国は 早速「アジア極東石油資源開発シンポジウム国内準備委員会」なるものを設け 外務省 通商産業省および関連業界その他の協力体制のもとに準備作業のスタートを切ったのである。

一方 ECAFE 事務局は外務省を通じて一般的な会議開催連絡とともに 東京開催の詳細な手はずについて

も打合わせの公文を送付してきており また C. Y. Li (ECAFE 産業部長代理兼天然資源開発課長)L.W. Stach (国連事務局石油顧問)の両氏は来日して 外務省・通商産業省などの関係方面と接渉・細部の打ち合わせをしている。

国内準備委員会は さらにこれら打ち合わせの結果を移行に移すべく 実行小委員会を設け 諸経費 会場 巡検および論文等に関する万般の準備を進めることとした。会期が近づくにつれて これら各小委員会の活動は 5つの大項目を議題とする討論を進め 総関係者 200名余りの活動の場として必要な4つの会議場と 10幾つの準備室の確保 現地討論・見学旅行の下準備と実行計画の策定 わが国から提出する論文の決定と印刷等と多忙をきわめるにいたった。さらにこれらの業務は 各国代表団の受け入れ準備作業と重なって 間に合うかどうか心配ぐらいであったが 関係者一同の努力は難なくこれを切り抜けて 準備万端整い 11月10日の開会式を迎えることができたのである。

II 会議に参加した国と人人

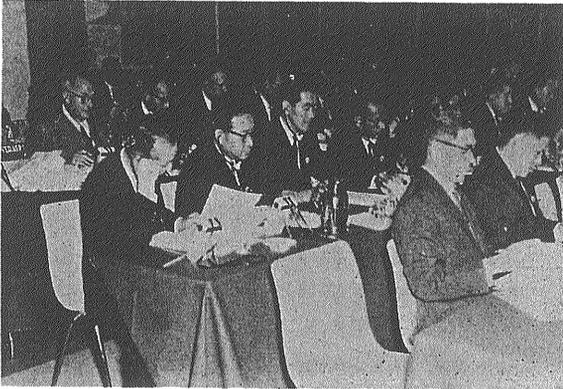
会議に参加した国は26カ国におよび 参加者は代表団員その他役員を合わせて163名となっている。主会議室の議長席の背後には 各国の国旗が国連旗と日の丸の旗を中央に擁してズラリ並んでいる。国旗の並び順も座席の配置も また後でいろいろ書類をまとめる場合の各国の並び方も 各国名頭文字によるアルファベット順



会場 高輪プリンスホテル



議長席



日本代表団

になることが多かった。ここにもおおよそその順にしたがって参加国とその国からの参加人員など出席者数を挙げてみたい。メンバー国としては

- ① アフガニスタン 2名
- ② オーストラリア 4名
- ③ ビルマ 4名
- ④ セイロン 2名
- ⑤ 中国(台湾) 6名
- ⑥ フランス 10名
- ⑦ インド 2名
- ⑧ イラン 10名
- ⑨ 日本 39名
- ⑩ 韓国 2名
- ⑪ マレーシア 4名
- ⑫ ネパール 1名
- ⑬ オランダ 2名
- ⑭ ニュージーランド 1名
- ⑮ フィリピン 1名
- ⑯ タイ 3名
- ⑰ ソ連邦 9名
- ⑱ イギリス 10名
- ⑲ アメリカ 19名

その他 強い関心と関連を持つ国として

- ⑳ ベルギー 1名
- ㉑ ドイツ 3名
- ㉒ イスラエル 2名
- ㉓ イタリア 1名
- ㉔ ルーマニア 3名
- ㉕ スウェーデン 1名
- ㉖ オーストリア 1名 それに加えて
- ㉗ ICFTU (International Confederation of Free Trade Union) 1名
- ㉘ ICC (International Chamber of Commerce) 1名
- ㉙ エカフェ事務局 11名
- ㉚ 国連技術援助局 3名
- ㉛ 国連本部 1名
- ㉜ 国連 Special Fund 2名
- ㉝ 国連東京情報センター 1名

の計163名があるいは代表団員としてあるいは重要な役員として参加した。

これら外国からの代表団員はそれぞれ各自の専門の立場から日本における各研究分野の動向や内容にあるいは各産業分野の現況製品などにきわめて強い関心を持っており人をつかまえては質問を発していたがそのような方面についてはもう少し準備しておいたらもっと満足を与えることができシンポジウムとはまた別の面からの貢献ができたような気がする。

III 会議の進行内容について

会議の進行はその日の議事の進み工合や会場の都合などによってあらかじめ定められていたスケジュールとはかなり食い違ってきたが事務局側の手際の良い事務さばきによって事なく日程を終わることができたのは全く驚きであった。この点からもとくに沢田エカフェ事務局員を長とし日本の各関係分野から参集して構成された事務局団の献身的な活動には心からの敬意を払う次第である。

11月10日から20日までの11日間議事日程は次のように月月金金のぶつ通しで強行された。会議終了の日に C. Y. Li が立って日程に無理があったことを指摘し次回第4回の日程は少なくとも2週間を予定する要があると述べていたのももつともなことである。

議事日程

10日(水) 全員着席 開会宣言 三木通産大臣挨拶
ECAF 事務局代表 U Nyun 氏挨拶 参加国代表挨拶
(三村日本代表 イラン前回開催国代表 インド代表
ビルマ代表 オーストラリア代表 ソ連代表 アメリカ
代表 フランス代表) 次いで議長土田豊と2名の副議長
イランの B. Mostofi およびビルマの U San Maung 両氏
が選出されていよいよ本会議の活動は開始された。

活動開始の第1歩として今回の会議において取り上げるべき務務内容が確認されている。これを要約すれば次のようである。

1. 総会で実施すべき会議内容

- ① 開会挨拶
- ② 議長 副議長の選出
- ③ 議題の採択
- ④ 第2回会議における提案事項について説明
- ⑤ 各国の石油資源開発の状況報告
- ⑥ 各国の石油地質
- ⑦ 石油探査技術および方法
- ⑧ 石油・天然ガスの開発・生産および理探
- ⑨ 石油・天然ガスの貯蔵・輸送および利用

- ⑩石油資源の開発生産および配送に関する経済性
- ⑪技術の研修訓練に関すること
- ⑫石油資源開発分野における国連の援助活動について
- ⑬今回の会議における最終的報告書の採択

2. 専門家会議内容

上記したように 総会では一応審議検討すべき議題を決定したが これらの問題に関連する次の2項目については 本会議と別に会議を進めることが各関係者に連絡された。それらは次のようである。

- ①ECAFE 地域内における地層の対比に関する問題
- ②ECAFE 地域における大陸棚資源の探査に関する問題

10日の午後は 前記決定内容の ⑤項目について会議は運ばれ 例によってアルファベット順のオーストラリアから 各参加国ごとに石油資源開発状況の総括的説明と質疑応答が行なわれた。

(11日) (木) 第2日目は 前日に引続いて各国事情の報告が行なわれ 一方午後からは 館内に設けられた別会議場で 地層対比に関する専門家会議が行なわれた。

(12日) (金) 第3日目は 前日の継続ではあったがむしろ提出論文の総括説明を通じて 各国の研究分野の進行情況が報告され 質疑応答が行なわれた。なお別会議場では各専門家会議が行なわれていた。

このようにして会議が進められている間にも 会議事務局では すでに終わった議題のとりまとめやら 各国代表団の発する注文に応じたり 会議進行の細部に対する告示 変更通知の配付などテンヤワンヤで 休憩はもちろん 夜も昼もない有様のように見うけられた。13日14日に計画されていた新潟地区の油田・ガス田および工場見学の詳しい旅行スケジュールもこの日配付された。

(13日) (土) 早朝 特別仕立ての列車で上野発 長岡からはバスを連ねて石油資源開発(株)の見付油田を見学した。同夜はホテル新潟と東映ホテルに分宿 県知事のはからいで 楽しい親睦の会を持つことができた。

(14日) (日) 折から降りしきる雨についてバスを走らせ 新潟港に碇泊中の白竜号 帝国石油(株)の南阿賀油田 日本瓦斯化学工業(株)の松浜工場を見学 11時30分新潟駅をたち帰京した。

新潟においてもそうであったが 会期中は頻繁に 会議をすませた後の時間を利用してレセプションが持たれ

た。これはどこの国際会議でもおおむね同じようだろうであるが 大臣 議長 各国大使館その他がそれぞれ主催して行なわれ 各国代表はいずれもきわめて愉快に各自の専門分野や各国のお国ぶりなど話題に花を咲かせ国際的な友好を深めることができた。

(15日) (月) 今日から17日までの3日間は 議題内容の⑥⑦⑧⑨⑩を3つの討論会に分け それぞれ次のような構成で議事を進めることになった。

(1) 第1討論会(議題⑥および⑦)

座長: B.S. Negi (インド)

議題⑥ 石油地質関係 議長: L. W. Stach (国連)

議長補佐: 嶋崎吉彦(日本)

議題⑦ 石油探査関係 議長: W.B. Metre (国連)

議長補佐: J. Schweighauser

(マレーシア)

(2) 第2討論会(議題⑧ 開発生産関係)

座長兼議長: H.S. Taylor-Rogers (オーストラリア)

議長補佐: F.U. Francisco (フィリピン)

(3) 第3討論会(議題⑨ 貯蔵・輸送利用関係)

座長兼議長: Parvis Mina (イラン)

議長補佐: W. Holik (アメリカ)

(4) なお議題⑩の経済関係の討論は総会として 議長: E.N. Avery (オーストラリア) 議長補佐: H. Izadi (イラン)および中原信之(日本)で行なうことになった。

15日にはこのような段取りの決定に引続いて第1討論会が行なわれている。討論はまたアルファベット順にきわめて活発に行なわれ 時折り笑い声も出てくるなど円滑に進められたが 日本の場合 各国で重視するような論文を提出しておりながら 語学の点などでやや応答不足の感があったのは心残りであった。

(16日) (火) 討論会日程の第2日目は 第1 第2 第3討論会それぞれ3つの会場に分かれて進められたが 専門家はそれぞれ関係の討論会に分かれて参加している。

この日から お昼休み時間を利用して 各国から持参された映画が上映されることになった。

会議も中盤を過ぎると はや まとめ作業が開始となった模様で 事務局側は映画どころではなかったそうである。

(17日) (水) 会議の予定が急変変更されて 議題⑩経済性に関する総会討論が行なわれることになった。こと経済性となると話は政治的傾向を帯びることもありなかなか面白い討論が進められた。技術交流と銘を打ってもこのような会議では所詮国際政情を無視できるものではないことがわかった。

(18日) (木) 18日午前には16日の継続で3つの討論会が行なわれ 午後は工場見学が行なわれた。工場見学の第1班は横浜の日本石油(株)の製油関係および川崎の石油化学工場 第2班は川崎製鉄(株)および日本鋼管(株)であった。

(19日) (金) 午前の総会では議事内容①の技術研修関係と②の国連援助関係について検討が行なわれ 午後からは明日を最終日に迎えて報告書原案作成会議などとりまとめ作業が開始された。この日は各国代表団の代表が夜遅くまでかかって草稿を閲し さらに事務局は総員徹夜で資料の作製印刷を急ぎ ようやく翌20日の閉会総会で行なわれた報告書採択に間に合わせている。

(20日) (土) 忙しくもあり とまどいもし また緊張の連続で終始した第3回 ECAFE 石油資源開発シンポジウムも 20日9時半から開催された総会において 準備された報告書は全部採択となり 続いて各国の挨拶 次回第4回はオーストラリアで開催することの方針決定そして最後に土田議長による閉会の宣言があり 11日間にわたって行なわれた会議は無事 多大の成果を収めて終了したのである。

IV 採択された報告書のあらまし

報告書はいずれその中に公表されるものと思われるので ここにはそのあらましを紹介する。報告書内容は11項目 タイプ用紙で本文69頁 付録54頁からなり 会議の内容が要領よく収録されている。

(1) 「緒論」においては 会議を東京で開催するにいたった経過から会議の準備 今回の会議の構成メンバー国 会議の内容目次にふれ 今回の会議における報告書は1965年11月20日正しく採択されたものであることが述べられている。

(2) 「第2回大会において提案された諸事項」が今回の大会経過を理解するための資料として説明されている。

(3) 「第2回大会以降本大会までの間における各国石油・天然ガス資源開発情況」が各国ごとに要約説明されている。オーストラリア ビルマ インドおよびイランにおける新しい油田・ガス田の発見が注目されており 日本については エネルギー消費量の急速な増加に伴って 精油部門の拡充と海外活動の強化 海底油田の開発と天然ガス利用面の拡大が著しいと述べられている。

(4) 「石油地質」については 各国ごとに 主要油田地帯に関する新しい地質資料について説明がなされている。日本については 地球化学的研究 貯溜層としての火山岩類 水溶性天然ガスなどの地質問題が述べられている。なおこの項に関連して別に討論された「ECAFE 地域内の地層対比問題」については別紙で報告されており これには日本とパキスタンが中心になって それぞれ太平洋側とインド洋側の対比問題をまとめ 今後の検討方針をかためて行くよう要望されている。

(5) 「探査技術」については 航空写真地質 海上物探 地球化学 微古生物 花粉の活用など いろいろな探査関係の技術が説明されている。

(6) 「開発・生産および理探」については 掘さく・油層工学・生産技術・理探法などに分けたかたちで各国提出資料が説明されており 日本については日本近海海底油田開発に際しての海深と気象の影響 Water drive 型油層の取り扱い 油層・ガス層の Potential の問題などが取り上げられている。

(7) 「貯蔵・輸送・利用」については 製油 天然ガスの液化 貯蔵・輸送・利用・保安およびこれらに関する技術的な問題がとりあげられ 日本については需要増に伴う関連問題が話題となった。

(8) 「経済性関連問題」については 世界の石油および天然ガスの需給関係から ECAFE 地域における需要量の増加傾向は 西欧のその2倍の速度で進んでいるということなどを述べ それらの数量的資料をあげている。日本については 海外産油活動に対して注目が払われている。

(9) 「技術研修」については 1963年イランで行なわれた石油研修と インドに設けられている訓練センターの活動など 国連の技術研修に関する活動経

過の説明があり 各国からの希望が述べられている。

(10) 「国連の関連活動」については 国連として行なった石油資源開発に関する技術援助 同様に研修技術交流を目的とする会議の開催 調査研究計画の策定 各国政府からの問い合わせに対する助言などについて説明されている。

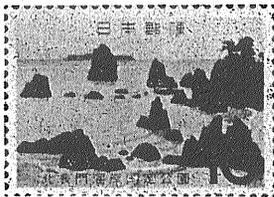
(11) 最後に 本大会としては 次の第4回 ECAFE 石油資源開発シンポジウムは 1969年 オーストラリアにおいて開催することを要望すると述べ とくに本文中にも述べたように 次回の会議日数は今回よりも多くするように希望されている。

V 概要の報告をむすぶに当って

以上のように 大きな成果を収めて第3回 ECAFE 石油資源開発シンポジウムは1段落を告げた。 思えば年度初めの準備のころから たいへんなことだろうと予期して迎えた大会ではあったが 今にして やはりたいへんであったという感じが深い。

最終日 20日の閉会式後参加者総員の記念撮影が終了後も 会場を立ち去りがたい風情で三三伍伍 庭内を逍遙している各国代表団員の肩さきに「ホッ」とした様子のうかがわれたのも やはり皆さんがたいへんであったからであろう。 この稿をむすぶに当たって 改めて この大行事を大過なく終着まで運んだ関係者一同の努力に対して 深く感謝の意を表し 今後の発展を祈って筆をおく。

(筆者は燃料部長)



地学
と
切手

北長門国定公園 堀内 恵彦

本州の西端 山口県の日本海に面し 旧幕時代に毛利氏86万石の城下町として栄え 幕末から明治維新にかけて多くの偉人を出た萩市を中心に 東は江崎須佐湾から西は大津郡油谷湾に至る 約90km にわたる海岸と 沿岸に点在する島々が公園指定地区で 約80.3km²の範囲です。 この公園の中心は なんとといっても「海上アルプス」の別称をもつ青海島で 公園地域の西に近く仙崎港の正面にみられます。 そのほか 須佐湾・六ツ島等の風景も ぜひ一度は見ておきたいものです。 交通の便は 表日本に比べるとまだ不便ですが バス・ジープルカーの発達で おいおいに便利になっています。 冬季における日本海の荒波により形成された豪快雄大な景観は 全く他では望めないものです。

青海島 は面積約18km² 周囲 40km 余の小島ですが 前述の日本海の荒波に浸された北部を中心に東西を含む三方面は 100m におよぶ断崖絶壁に 洞門・石柱・岩礁が点在し 壮大な海食の景観を呈しています。 この海岸は 石英斑岩・砂岩・輝緑凝灰岩などの岩石で構成されているためその岩質により海食の度が異なるので この奇勝となったものです。 この地の探勝は四季を通じて可能ですが とくに冬季に この岩壁に押し

寄せる荒波が作り出す 狂瀾怒濤の壮観は 全く他に比べるものがありません。

青海島東南部の通(かよい)部落には くじらの墓があります。 これは元禄五年(1692年)の建立で 高さ約2.4m 正面に 南無阿弥陀仏と彫っており また この所属する向岸寺には くじらの位牌と過去帳が保存されており。 これらは 子鯨を思ふ親鯨の心情をあわれんで 漁人が捕えた日を命日とし 戒名をつけて菩提をとむらったもので 仏教信仰に篤い 漁人の美風といえましょう。 通部落の西 大日比の西本家の邸内には なつみかんの原樹があります。 これは 今から約200年前の安永年間に 漂着した夏みかんの果実を拾い 種子をまいたものが育ったのだといわれ 現在萩地方名産の夏みかんは この地から種子をわけたといわれ 史蹟天然記念物に指定されています。

竜宮の潮吹穴…公園区域の西端 大津郡油谷町津黄にあり 玄武岩にできた竜宮窟とよばれる洞窟があつて この洞窟の上の岩盤に 細い割れ目があり 波が打ち寄せて 海水が洞内に突入すると 洞内の空気が圧縮され 割れ目から外に出ようとし奇声をあげ 数十メートルの高さまで 海水を吹き上げ 波の高いときは200mもの高さにまで達するといわれます。 この付近は魚が多くしろうとでも タイ・チヌ・ホウボウ等を釣ることができます。 また 公園区域にははいりませんが 近くに長門湯本・俵山の両温泉(ともに単純泉)があり 俵山温泉は 国民温泉に指定されています。 切手の図案に採用されたのは 青海島北岸の ほぼ中央部にある 十六羅漢と呼ばれる岩礁風景で その岩礁・石柱などが 海岸から海中にかけて点在する様子から名付けられたもので 昭和37年2月15日の発行です。

(筆者は元所員 現科学技術情報センター)